

年でした。そして、まちがったことのきらいな、正義感の強い少年でもありませんでした。

「稔、どうしても、けんかのわけを母ちゃんには言えねのか。」

「……。」

「そうか。でも、稔。人をきずつけることは、けっしてしちやなんねえぞ。」

母の言葉に稔はだまっとうなずきました。

「ところで、稔。おめえ、大きくなったらなにになりてんだ。」

「おれ、軍人さんか、会社を作って社長になっちんだ。そして、父ちゃん母ちゃんを楽にしてやっちいんだ。」

稔の言葉に、母は涙をうかべていました。真っ赤な夕日は、稔親子の顔を赤くそめながらしずんでいきました。

